

牛群検定通信 No152

～ 牛との接触事故を無くし、ケガをなくしましょう ～

家畜との接触事故の件数は農業機械による事故を上回っている、と言われて
います。事故が起こると長期入院が必要な事態に至ることが少なくなく、家族
の作業負担が大幅に増える上、人手不足による検定中止や発情や疾病の兆候
の見逃しにより経営損失を招く恐れがあります。事故要因というと人の過失、
つまりヒューマンエラーばかりが取り沙汰されていますが、実際は複数の要因
が関係して発生することが多く、事故分析の研究においては機械的要因、環境
的要因、人為的要因、牛に関する要因、安全管理上の要因を挙げています。具
体的には、破損したサイドパーティションを修理せず放置していた、折れた支
柱の位置に気づかなかった、背後の発情牛の行動を警戒していなかった、搾乳
に対して神経質な牛に対する警戒を忘れていた、負傷後速やかに医療機関を受
診しなかった等、ちょっとした不注意や事故の前からの牛舎整備の不備が挙げ
られています。

望まれる対策事故要因を洗い出せれば、自ずと対策も立てやすくなり、事前
に対策が取られていればケガを防げたとも言えます。

環境的要因からは、①破損箇所は速やかに修繕する②牛舎内を適切な照度に保つ（おおむね床から90cmの高さで200ルクス前後）③牛舎内を清潔に保つ、といった対策が挙げられます。牛に関する要因からは、①発情牛と搾乳に神経質な牛を離れた牛床につなぐ②それが無理な場合は発情牛に目印を付ける③搾乳ストレスを減らすため初産牛への搾乳馴致（じゅんち）を丁寧に行う、といった対策が考えられます。人為的要因からは、牛に関する要因でも挙げられたように①発情牛など不測の行動をとるリスクの高い牛を認識し安全靴などの保護具を身に付けて作業に臨む②ケガをしたときの応急処置や速やかな医療機関への受診と被災者が離脱中の作業対応など、日頃から緊急時の対応方法を明らかにすることが必要です。

事故を防ぐには、まず事故を知ることが大切であり、「自分は大丈夫」という認識を取り払い、いつ事故が起きても不思議ではないと認識しなければなりません。「そうならないための対策」に加え、自分がケガで働けなくなった場合の「そうなったときの対策」が必要で、考えておくべき事項としてはヘルパーの費用負担額や授精など繁殖関連の判断を委ねる人の確保などが挙げられます。

両方の対策を適切に取ることができれば、事故の発生リスクが低下し、万一の事故でも乗り切れる具体的な方策が明らかになり、不安が払拭されて日々の作業にもゆとりが生じミスが減れば、牛にもリラックスした雰囲気が伝わり、対人ストレスの低減により危険行動のリスクはさらに減ります。こういった好循環に持ち込むことができれば、持続的な酪農経営を実現でき、労働安全と収益向上への第一歩として他産業でも常識とされている「整理・整頓・清掃・清潔」、いわゆる4Sの実践により作業の無理・無駄が減り、事故リスクの低減と作業の効率化を両立できるばかりか、検定成績の向上にも繋がります。酪農作業事故の課題や対策については農研機構農業機械研究部門のウェブサイト

「農作業安全情報センター 事故事例」に詳しく述べられているので参照してください。（<https://www.naro.affrc.go.jp/org/brain/ankenweb/chousadb/chousadb.html>）

（渡邊）